

断章 旭川のアイヌ語地名研究

53

高橋 基

石狩川に左岸から突き出ている岩である、掲載地図と写真の「ポロレプシペ」(poro-rep-us-pe 大きい・沖についている・者「岩」)はこの岩が位置の特定ができることでも重要な役割をなしている。

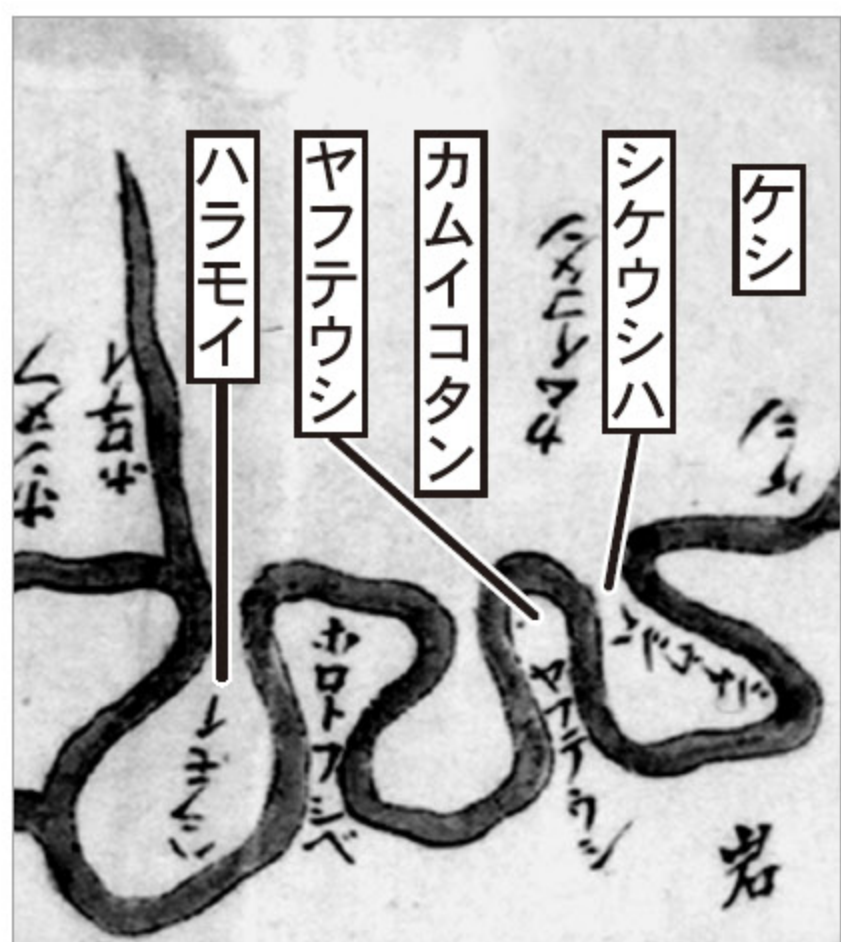
安政四年(一八五七年)に松浦武四郎はこの岩から下流二丁(約二二八)に、丸木舟から荷物を陸揚げし、荷物を背負う場所である「シキウシバ」(sike-us-i 荷物を背負い・つけている・所)和語の「場」―松浦は、『荷物背負場』と表記があると記述した。

ところが、明治二十三年に調査した永田方正は、翌年発刊した『北海道蝦夷語地名解』では、この岩を「レプシユベ」(repushbe 川中の岩)と書き、この岩の上流に、丸木舟から荷揚げする地名として、「イヤプテウシ」(i-ya

pe-us-i 揚場)―荷物を陸揚げする処なり」を記載した。しかし、松浦武四郎や明治期の調査記録や紀行からも、ポロレプシペより上流に、荷揚げ場があるとは考えられないのである。

永田方正の『北海道蝦夷語地名解』の石狩川の地名解の地名記載方法は、原則的には、石狩川の下流の左岸から上流の水源まで記述し、その後、右岸の下流から上流の水源まで順次書く方式である。掲載図の「現・神居古潭」の例で見ると、シラッチセは、「本川の右」(石狩川の右岸)、パラモイは、「本

旭川のカムイコタン⑩



文化7年『蝦夷地図』



現・神居古潭



ポロレプシペと神居岩と旧駅舎

川(石狩川の川中)としてイヤプテウシも、「本川」(石狩川の川中)と記述している。

昭和三十五年、知里真志保は、『上川郡アイヌ語地名解』の「まえがき」で、

地名記載順について、永田と同様に川下から川上に向かって地名を列記したと書き、永田と異なる点は、「左」とあるのはアイヌ流の考え方に従って「川上に向かって左(註・右岸)」をさし、「右」は「川上に向かって右(註・左岸)の意味である」としたことである。

知里真志保は、このように地名記載

方法を明確にしながらも、本連載の④

のカムイコタン⑤で紹介した、「イヤ

プテウシ」(i-yapte-us-i 物を

陸揚げし・つけている・所)―神居古潭

の吊り橋(註・神居大橋)の下。』を、永

田同様に、掲載図のポロレプシペの上流に記載している。これは、知里真志保が、イヤプテウシの位置を、「神居大橋の下」と明記しながらも、記載順はポロレプシペの上流に記載するという矛盾を露呈している。

なお、松浦武四郎が記載したシキウシバは、永田・知里の地名解にはなく、永田・知里が採録したイヤプテウシは、松浦のカムイコタンの記録にはない。この二つのアイヌ語地名が、同時に記載されている地図が、管見では唯一、掲載地図の『蝦夷地図』である。

文化七年(一八一〇年)の『蝦夷地

図』は、国文学研究資料館史料館所蔵

図で、作者が間宮林蔵という説のある

地図である。ただし、テシ(tes 岩梁)

がケシと誤写されているので、間宮の

直筆ではなく、写図と推測される。図

中のヤフテウシ(「イヤプテウシ」

yapte-us-i 揚場)―荷物を陸揚げ

する処)と、シケウシハ(「シキウシバ

(sike-us-i 荷物を背負い・つけて

いる・所)和語「場」)の二つのアイ

ヌ語地名は、文化期には併存していた

ことを物語る貴重な地図であるとい

える。(アイヌ語地名研究会幹事)

※毎月第1週号に掲載します